

日本英語教育史学会 会報

311

2022 年 10 月 24 日

HiSELT *Society for Historical Studies of English Learning and Teaching in Japan*

日本学術会議協力学術研究団体 日本英語教育史学会

発行人 日本英語教育史学会 (代表: 田邊祐司)

 事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町 5562
 県立広島大学 庄原キャンパス 河村和也研究室
 tel: 0824-74-1727 fax: 0824-74-0191
 e-mail: membership@hiset.jp

 会費納入口座 (名義人: 日本英語教育史学会)
 ゆうちょ銀行【振替口座】00150-3-132873
 ゆうちょ銀行〇一九店【当座口座】0132873

学会公式ウェブサイト www.hiset.jp

第289回研究例会報告

2022 (令和 4) 年 9 月 17 日 (土), 第 289 回研究例会が Zoom を用いたオンラインの形態により開催されました。参加者は 26 名でした。

例会では 2 つの研究発表が行われました。最初の研究発表では、末澤奈津子氏 (京都橘大学 [非]) が「多様性を促す教科書の在り方: 高校英語教科書における国際理解」というタイトルでお話されました。続いて平賀優子氏 (慶應義塾大学, 東京大学 [非]) による「日本における英語「発音と綴り」指導の歩み—スプリングブックからフォニックスまで—」の研究発表が行われました。総合司会は馬本勉氏 (県立広島大学), 発表 1 及び 2 の司会は田邊祐司氏 (専修大学) でした。以下に参加者の感想を掲載しますのでご参照ください (①は末澤氏, ②は平賀氏の発表への感想, ③は会全体に対する感想です)。

<発表 1 の感想>

◆「無意識のバイアス」というとても重要なテーマについて、豊富なデータを添えて発表された素晴らしいご発表でした。「国際理解」に関する教科書の題材研究では、ぜひ歴史的にさかのぼって研究されることを願っています。明治初期の文明段階説による白人 (欧米) 優位主義、第一次世界大戦後の国際協調主義 (例えば 1926 年版の神田乃武の CROWN READER 5 には国際連盟の課があります), 戦後直後の JACK AND BETTY などのアメリカ文化一辺倒など、日本人の異文化バイアスを考える上で重要なことだと思います。近年の教材の保守化については、最近の教科書の記述を政府見解に従わせるという一種の言論統制が特に問題だと思います。

(みかん舟)

◆私も高校教員の頃から、三省堂の MY WAY の教科書の仕事に関わっているので、とても参考になりました。ありがとうございます。(外山徹)

◆一英語学習者として、これまで小学校から様々な形で英語に触れてきており、無意識のバイアスにかかっているのだなど、お話を聞きながらも過去を振り返っておりました。私自身無意識の中で、ネイティブ思考になっているのだと思いました。末澤先生が実施されたアンケートの質問内容を考えてみた時に、やはり、一個人として、友人として外国の方と関わる際には、どこの国籍かということは全く考えておりませんが、学習という面に関しては、やはりネイティブから学びたいという思いがあると自覚しました。英語学習者として、英語だけではなく文

化面に関しても学び、理解してきたと思っておりましたが、偏った思考になっていると感じました。これからの英語学習への思いとして、様々な英語があり優劣はなくそれぞれ素晴らしいものであることを認識し、英語に触れていきたいと思うようになりました。

また、卒業研究に本格的に取り組むようになってから初めて参加させていただいたこともあり、発表方法や資料に関してもたくさん学ばせていただくことができました。

これまでも何度もご指摘いただいていたことではありますが、一枚の資料の中での情報量や見やすさなど工夫が素晴らしいと感じました。私がこんなこと言うのもおこがましいですが、とても見やすく、お話ししっかりと注意を向けることが出来、スムーズに理解が出来る発表であったと思います。話の構成や順序立てなども綺麗で、これから卒業研究を進めていく中で参考にさせていただき、より分かりやすく簡潔な研究を作れるよう頑張りたいと思いました。本日はご貴重なお話をありがとうございました。(高橋大介)

◆「バイアス」をめぐる英語教科書の変遷と学習者の傾向分析を大変興味深くうかがいました。ご提示された教科書研究の枠組みを用い、古い教科書に遡って分析されると、非常に面白い壮大な教科書史が描けるのではないかと期待を膨らませております。続編を楽しみにしております。ありがとうございました。(Horse)

◆Native-speakerism について非常に興味深いご発表をありがとうございました。私は、英語教師を目指している学生ですが、リスニングや音読の練習をする際はいつも NS の音声を聞いて練習しています。末澤先生が話されたように、自然と NS の音声を選んでしまうということはそこに無意識のバイアスが存在するのだと思います。教師の働きかけ次第でこうした意識を変えるきっかけになると良いと思いました。(横山夏美)

◆前回のご発表も含めて今回拝聴したため、とても理解が進みました。教科書に改善が見られたにもかかわらず、学習者にはその影響があまり見られない、あるいは、むしろ英語が得意な学習者ほどバイアスが色濃く見られるという結果にとっても驚きました。(ポレポレ)

<発表 2 の感想>

◆詳しく御説明くださり、とても興味深く拝聴致しました。ありがとうございました。(外山徹)

◆面白いご発表でした。スペリングブックから IPA (1920 年代) への移行がご発表の中心だったようですが、その中間の諸形態についての考察も必要かと思えます。つまり、日本人は当初はウェブスターのスペリングブックをそのまま使っていました。しかし、明治 20 年前後から久野英吉、伴徳政、神戸直吉、斎藤秀三郎などによる日本人学習者向けの簡易なスペリングブックが出ました。その前後から Primer の中で発音とスペリングの関係を学ばせる教材が出て、やがてそれらはリーダーの第 1 巻に吸収されていったように思います。そのあたりも踏まえた上で、リーダーの発音記号がウェブスター式から IPA へと変化した流れをご提示されると、より精緻になると思いました。論文化を願っております。(みかん舟)

◆発音と綴りの両者を同時に学ぶ英語初学者の苦勞に改めて目を向けることができました。この点から見ると、カナによる発音表記が不十分であったとしても、明治のスペリングブック独習書がいかに親切な書物であったかを思われます。EFL の観点から歴史的な学びを見直す上で示唆に富む興味深いご発表でした。ありがとうございました。(Horse)

◆非常に興味深いご発表をありがとうございました。歴史的な文献をもとに、日本人がどのように英語の発音を綴りを通して学んできたかを知ることが出来ました。ENL の環境で学ぶフオ

ニックスが EFL の環境で学ぶ際はどのように変化するのか大変興味を持ちました。(横山夏美)
◆スペリングブックを含めた教材の歴史的変遷を端的に示してくださり、とても興味深く、参考になりました。内容的な特徴およびその変遷をみると、当時の複数の学習教材の横断的な比較分析もまた必要になりそうだと、自戒を込めて考えるに至りました。(ポレポレ)

<会全体に対する感想>

◆高校英語教員の定年を迎えてから、日本の英語教育史に興味、関心を持つようになり、ごく最近、参加させていただくようになりました。毎回、自分が知らないことばかりで、研究会が楽しみです。これからもよろしくお願い致します。(外山徹)

◆本日は貴重な機会ありがとうございました。お時間があわず久々の出席となってしまった事まずはお詫び申し上げます。申し訳ありませんでした。後期が始まるこのタイミングでとても刺激となる回に参加させていただけたこと大変感謝しております。残り短い学生生活の中で、更なる努力を積み重ねていき私自身の目標の到達や、卒業研究など様々なものを納得のいく形で終わらせられるよう精進していきたいと思いました。改めまして、本日はありがとうございました。(高橋大介)

◆例会に加えて最近懇親会も開いていただき、いつも楽しく参加させていただいております。来年の全国大会はハイフレックス開催とのことで、今からとても楽しみにしております。(ポレポレ)

発表を終えて

末澤 奈津子 (京都橘大学 [非])

前回の「ジェンダー理解」をテーマにした研究発表が、大変好評であったとの押田先生のお言葉を鵜呑みにして、今回は「国際理解」で発表させて頂きました。英語教育での「国際理解」は、過去の教科書研究が示すように登場人物の国籍の「多様性」ですが、一方で、戦争反対や人権尊重などユネスコ創設の目的ともなった「平和」教育であるとも言えます。私は、両者の根源にあるものを「他者理解」と捉えており、他者理解を促すための英語教育や教科書のあり方を研究してきました。結局、どんなに人間が公平で平等を目指したとしても生まれながらの帰属や生育環境によって無意識的に習得する偏った価値観を「無意識のバイアス」と呼びます。それを、何度も校閲を行い検定を合格した教科書や英語教育における母語話者志向に置き換えました。英語を専攻とする者ほど、(未だに)母語話者志向が強く、ネイティブを「本物」であり「お手本」と捉えているインタビュー結果も散見されました。非ネイティブである純国産の英語教員の役割——英語教員である自分の存在意義を問うような質問ですが、日本人教員自身がネイティブをモデルとする「無意識のバイアス」に気付くきっかけになった研究でした。

発表を終えて

平賀 優子 (慶應義塾大学, 東京大学 [非])

この度第 289 回例会における発表の機会をいただきまして、ありがとうございました。発表後の質疑応答での貴重なコメントをくださった先生方、とりわけ例会終了後も学会員に向けて資料をご紹介くださった竹中先生、竹林先生の思い出をまとめてくださった河村先生にはこの場をお借り

して重ね重ね御礼申し上げます。日本英語教育史学会には、私が大学院生の頃より四半世紀もお世話になっておりますが、発表させていただいた際に、いつも時間をかけてたくさんのコメント、情報をいただける本当に温かい学会だと改めて感じた次第です。

今回は、予てより私が大学の英語の授業で取り扱っている音声学（主に IPA）とフォニックスについて、歴史的に振り返ることで新しく何かが見えてくるのではと、明治期より遡って種々の文献に当たって参りました。特に、小学生のための英語教育ということで最近注目されているフォニックスについては、近年はその実践報告、効果を謳う先行研究こそ多く見られるものの、我が国ではどのように移入され、実践されてきたのか、歴史的な切り口で論じたものは数えるほどしかありません。やみくもに英語母語話者の国語教育のための方法を導入しようとしても、その本来の目的や日本人が発音と綴りの関係性をどう学んできたか、これまでの経緯を知らなければ、結局「スペリングブック」が大注目された後、消えていったという歴史が繰り返されるだけです。フォニックスは私たち EFL 学習者が発音を学ぶ方法では決してありません。もちろん「発音と綴りの規則を学ぶこと」が目的でもありません。規則を学ぶことで我々日本人の英語の学びにどうつながるのかを考えた際、やはりフォニックスには音声学の基本的な知識は必須であることが見えてきました。今後は、これまでの「発音と綴り」指導を受けてきた先人達のエピソードを具（つぶさ）に調べながら、EFL のためのフォニックスはどうあるべきかを考えてまいりたいと思っております。

>> 事務局より

>> 理事会を開催

第 289 回研究例会に先立ち、9 月 17 日（土）正午よりオンラインで 2022 年度第 1 回（臨時）理事会を開催しました。議事は以下の通りです。

(1) 第 39 回全国大会について

第 39 回全国大会を 2023 年 5 月 20 日（土）・21 日（日）の両日に開催することを決めました。

新型コロナウイルスの感染状況に鑑み、オンラインを主体としつつも、受信・発信の拠点（開催地）に対面でもご参加いただける形態（いわゆるハイフレックス）を採用することとしました。開催地は神奈川大学のみなとみらいキャンパスとし、久保野雅史副会長が大会実行委員長を兼ね、学内の調整に当たります。

第 39 回全国大会（横浜大会）の詳細については、あらためて会報等を通じてお知らせします。

(2) その他

第 38 回全国大会における田崎清忠先生のご講演について、その記録動画を YouTube で公開したところ、視聴申込者は 70 名（会員 5 名、非会員 65 名）、再生回数は 133 回を数えた旨の報告がありました。

また、当日の研究例会の進行次第を検討・決定するとともに、今後の例会運営について確認しました。

（文責：事務局長）

>> この先の研究例会・全国大会

- ◆ 第 290 回研究例会 2022 年 11 月 19 日 (土) オンライン開催
- ◆ 第 291 回研究例会 2023 年 1 月 7 日 (土) オンライン開催
- ◆ 第 292 回研究例会 2023 年 3 月 18 日 (土) オンライン開催

→日程や場所は変更される場合があります。その際は会報およびウェブサイトでお知らせします。

研究例会での発表希望者は、(1) 発表希望月、(2) タイトル、(3) 発表概要 (100~200 字程度)、(4) 使用予定機器、の 4 点を明記の上、発表希望月の 3 ヶ月前の 10 日 (1 月発表希望であれば 10 月 10 日) までに日本英語教育史学会例会担当へお申し込みください。

Email: reikai@hiset.jp

>> 新入会員

- ◆ 山本 小枝子 (やまもと さえこ) 愛知県 愛知県立大学院生
- ◆ 升井 裕子 (ますい ひろこ) 埼玉県 拓殖大学大学院生

>> 英語教育史フォルダ

- ◆ 江利川春雄『英語教育論争史』が講談社より刊行された。定価は 2,035 円 (税込)

「外国語教育史料データベース」復活のお知らせ

和歌山大学のサーバー交換などにより数年前からアクセス不能となっていた「外国語教育史料データベース」が復活しました。科研費の助成を受けて作成した「明治以降外国語教科書データベース」(データ数 5,679 件)、「明治以降外国語教育史料デジタル画像データベース」(2,490 件)、「幕末以降外国語教育文献コーパス画像データベース」(3,815 件) の 3 種類です。

バックアップデータを民間のサーバーに移し替えたことで、アクセスが可能になりました。一部の消失データやソート機能の不具合などは修復困難でしたが、英語教育史研究の基礎資料を提供できるものと思います。「外国語教育史料データベース」のサイト

<https://erikawa.xrea.jp/>

からアクセスし、ぜひご利用ください。(江利川 春雄)

日本英語教育史学会 第 290 回 研究例会

日 時： 2022 年 11 月 19 日 (土) 14:00～17:00
オンライン開催

研究発表

三木光斎の図解単語集の研究：
『通俗 英吉利単語篇』の影響下で

熊谷 允岐 氏 (茨城大学〔非〕)

【発表者から】本研究は、明治初期に出版された三木光斎の 4 冊の図解単語集の比較分析を通して、当時の日本人における英語語彙学習の一端を明らかにすることを目的とする。三木の図解単語集の一つである『英学童観抄』は、当時大きな影響力をもっていた『通俗 英吉利単語篇』に依拠していることが従来報告されていたが、他の三冊がどのような影響関係を有しているかについては明らかにされてこなかった。その点の解明を含め、本発表では三木の図解単語集が当時の語彙学習にどのように寄与し得たかについて報告を行う。

研究発表

岡倉天心・岡倉由三郎の義兄岡倉真範について
—英語教師であったその人生—

藤本 文昭 氏 (横浜翠陵中学・高等学校)

【発表者から】横浜市に転居して 10 年になる。横浜市と一言でいっても様々である。観光地として有名な、なみなとみらい、新幹線の駅がある新横浜もあれば、東京に近い地味な住宅地もたくさんある。拙文のタイトルにある岡倉真範は、そんな住宅地の一つ、横浜市緑区台村にゆかりのある人物で、東洋の芸術を世界に知らしめた岡倉天心、大正・昭和初期に日本の英語教育に多大な影響を与えた岡倉由三郎の義兄である。明治から大正初期まで、学習院や正則中学校で英語教師をしていたと言われる。先行研究も少なく、関連資料の発掘も不十分ではあるが、私自身の居住区にこんな人物がいたことを報告し、英語教育史の一部に残すことで今後の研究題材の糧としたい。

参加費： 無料

問合せ： 日本英語教育史学会例会担当 (reikai@hiset.jp)

EDITOR'S BOX 新型コロナウイルスの第 7 波が終わり、入国者数の上限が撤廃されて個人の外国人旅行者の入国も解禁されるなど、コロナ前の状態に大分戻ってきましたが、一方で第 8 波の到来やインフルエンザの大流行が懸念されるなど、「安心・安全」と感じられる状態に戻るにはまだ先がありそうです。／先日新幹線を数年ぶりに利用したのですが、隣に人が座るのか来ないのか、停車駅ごとにとても気になりました。もうコロナ前のような意識ではいられないことを自分の中で実感する衝撃的な出来事でした。(若)

© 日本英語教育史学会会報編集部 (秋田大学 若有研究室 wakaari@nifty.com)